

若いお母さんたちへ

はるにれの会

榎田二三子



我家は、この冬五才と三才になる娘たちと父親、そして母親である私との四人ぐらしです。父親の転勤に伴ない埼玉県所沢市から新潟市へ転居し半年が過ぎました。表日本から裏日本への引越。たかが日本の中と考えていた私にとって、新潟での生活は驚きの連続でした。氣候、風景、食べ物、習慣、そして子どもたちの遊び歌も違い、好奇心豊かに生活すれば、それは楽しい所でもあります。ただひとつ困ったことは、交通のことでした。県庁所在地とはいっても東京とは違いますので移動は車かバス。日常生活で電車に乗ることは皆無です。車を運転

できなかった私は、車で行けば二十分で着くところへ、二人の子どもを連れ、バスを乗りつき一時間以上かかって行かなければなりませんでした。自宅での生活が一段落し、長女の保育園生活も軌道に乗ったところで、私は自動車教習所へ行くことに決めました。

ところで問題は、二才五ヶ月の二女Mでした。Mは引越した当時、社宅の子どもたちが近づいて来ると「だめ。」と言って、私の影に隠れてしまうのです。長い冬が終り、外で遊ぶようになった子どもたちとやっと顔見知りになり、私と一緒になら近所の家へ遊びに行くようになったところでした。教習所の託児室へ預けることにしましたが、いったいどうなるやら心配です。託児所の印象を少しでもよいものにしりたいと思い、事前に連れて行き一緒に遊びました。託児室のおばさんは、とても感じのよい方でした。おそらく一週間程は泣かれるだろうが、きつとうまく遊んでくれるだろうと思いました。

初めて預ける日。泣かれるだろうかと心配していたのですが、泣きそうな顔をしながらも別れられ、ほっとし

ました。お迎えの時には、ほほに涙のあとがありました。二日目。今日は泣くかと思いつつも、どうにか泣き顔は見ずに別れ、また帰りは涙顔という具合でした。二日とも泣き顔を見ずに別れたので、もう大丈夫かと思っていた三日目。託児室に抱いて入ったとたん大泣きになり、しがみついて抵抗するM。今日はやめようかと思いましたが、託児室のおばさんにMをむしりとられ行ってしまうと言われ、後髪を引かれる思いで教習を受けるのでした。こんな様子が六日目まで続きました。

そして一週間目。また泣かれるのかと思っていた私の意に反して、託児室についたMは、バイバイと言っておばさんの所へ行ってしまったのです。それからのMは託児室を自分の生活の場として受け止めたのか、おばさんと遊ぶことを楽しんでる様でした。それはきつと、母親である私とはまた違った受け止め方をしてくれるおばさんのあり方が、とても快よいものだったと思うのです。教習所を卒業して三ヶ月たった今も、Mは、おばちゃんの所へ遊びに行きたいと言っています。

いつもおねえちゃんと一緒に遊びまわっていたMにとって託児室は、ひとりで他の子どもたちと遊ぶ初めての場でした。ちょうど年の近い三、四人の子が預けられており、しだいに友だちの名前がMの話の中に出てくるようになってきました。電車ごっこや、お風呂ごっこをしたとか、けんかをした話をしてくれ、おやつを交換してポケットにたくさん詰め、迎えに行った私にくれるのでした。赤ちゃんもひとりいて、そのことがMには、とてもうれしいことだったようです。それまでは、おねえちゃんと同じくらいの子と遊ぶことばかりで自分が一番小さかったのに、自分より小さい子がいて、ここでは自分はおねえちゃんと呼ばれるわけです。家へ帰ってもMは大きいんだ、おねえちゃんのだと言っていました。託児室で過した間に、Mは自分が大きいんだと思い、同じくらい友だちと遊ぶ楽しさを味わってきたのでした。

教習所が終り、皆がばらばらに過ぎていた夏も終わった頃、Mは私から離れ同じくらいの社宅の子どもたちと遊び始めました。娘たち二人が遊びに出してしまうと、昼間

でも私ひとりの時間ができました。のんびりと自分の好きなことができる、そのうれしさにひたり、自分の時間を過すことにしばらくの間夢中になっていました。子どもが離れてくれるようになるとこんないいことがあるのかと思います、子どもをほったらかしにして、ひとりきりになることを楽しんでいました。そしてしばらくたった頃。三階の窓から見える子どもたちの様子が気になってきました。午前中は保育園へ行っていない二、四才の数の子どもたちが遊んでいます。外で自転車を乗りまわしていたかと思うと、どこかの家へ入りこみ、また出てきて我家へ来たりするので。私は、天気がよいのだから外へ行きなさいと追い出しました。そんなことをしているうちに、子どもたちはほったらかしにされ（私も含めてですが）楽しんではいないのではないかとやっとなぐりました。

おかあさんから離れないSちゃんのおかあさんが、よく子どもたちの相手をしていてくれました。ほったらかしではいけないと思った私が再び外へ出るようになり、

Sちゃんのおかあさんと子どもたちのことを話してみますと、Sちゃんのおかあさんも私と同じことを感じていたところでした。それでは、子どもたちの毎日ももう少し楽しくしようということになりました。新潟は秋が短かく、十月も中旬すぎると雨が多くなり、十一月にはみぞれとなり外では遊べなくなるそうです。この短い秋を少しでも楽しもうと、お弁当を持って公園へ行くことにしました。

お散歩その一——いつもの自転車や乳母車をやめ、おとなの足で五分程の所にある公園へ歩いて行くことにしました。道端の木の実や草花をとったり、坂道があると走りおり、三十分程かかってやっと公園へ着きました。この日は親も見ているだけではなく、体を動かして一緒に遊び、ミニストレッチをやってみたり小さな丘から一緒にかけっこをしたり楽しく過しました。子どもたちと遊ぶうち親たちの遊び心もめざましたのか、最後には母親たち三人がタイヤのブランコによじ登りキャーキャー言いながら大はしゃぎ。子どもたちはというと、夢中に

なっている母親たちをあぜんとして見ているのです。この日は、子どもたちが満足しただけでなく、母親たちも楽しく満足して帰ったのです。

お散歩その二——毎日公園へ行けるわけではありません。銀行へ行く用事があったり、八百屋さんへ行ききたかったりします。なるべく歩いて行くようにし、途中の道で子どもたちが楽しめるようにして行きます。特に子どもたちのお気に入り、八百屋さんへ行く道です。長い階段のある坂道。おとなにしてみれば、ほんのちょっとした坂なのですが、子どもたちは、よーし登るぞと意気揚揚と歩き始めます。車がびゅんびゅん通る道では、あぶないということにおとなの注意が向き、楽しむ余裕がありませんが、この道を通っていくと、あつという間に八百屋さんに着いてしまします。

お散歩その三——この間は、乳牛を飼っている農家があるという話を聞き、行ってみることにしました。いつもながら花をつみ、いちじくにさわったり、ヨーイドンと走ってみたり、そのうち畑の端にすわりこんで大根を

ながめたりして行きます。やっとなつた牛の所では、恐いと言って子どもたちは牛の家へ入っていきません。親たちは楽しくて、牛にじっと見とれてしまいます。何頭いるのかなと数えてみたり、子どもの牛もいるよと喜こんだり、屋根裏はすごいクモの巣だと大きわざ。その時、突然ジャジャジャーとすごい音。牛のおしっこだとさわいでいると、牛のおしっこにさそわれ、恐がっていた子どもたちも見に入って来ました。次はうんちかなと行って今度は子どもたちが帰ろうとしません。ボタボタ。あうんちした。あつちは、おしっこだ。と今度は子どもたちが大騒ぎ。やつと帰る気になり、帰りがけ、おじさんに赤ちゃんが生まれるのですかと聞くと、昨夜生まれたばかりだという話。みんなが寝ていた間に生まれたんだってと行って、みんなで感激してしまいました。

あまり楽しく過したので、お弁当を持って公園へ行ってみないかと他の人たちにも声をかけてみました。すると、めいわくかけるからと子どもを家へ入れてしま

人。どうぞ連れて行ってくださいと言って子どもだけよこす人。よくやるわねと言う人。一番近い公園しか連れて行かないのという人。その反応にびっくりし、ただ子どもたちの毎日をもう少し楽しくしたい、そのために少しくらい家の中が片づかなくても少しの時間子どもと楽しく過そうと思うだけなのにと落ちこんでしまいます。

結局三組の親子で出かけたり、お昼を持ちよったりということになりました。一緒にいる時間が長くなると、三人の子どもたち（二才三ヶ月のSちゃん、Y君と我家のM二才十ヶ月）のぶつかりも目につくようになってきました。三人それぞれに主張が強く、ぐっと頑張つてゆずりません。そこで、すぐ手や足が出るのがMです。

Mは、なかなかしゃべり始めず、アーウーですべてさせている時期が長くありました。母に電話をすると、しゃべったか、まだかといったことが話題になる程でした。二才四ヶ月を過ぎたあたりからよくしゃべり始め、会話が成り立つようになってきましたが、今でも話したいことがあると、あのね、あのね、おねえちゃんがね、

おねえちゃんがね、〇〇したいのといった調子ですの
で、けんかのような場面になれば、だめと言ってドンと
手が出てしまいます。Mにはそれなりのつもりがあるの
ですが、それを話して伝えるということはむづかしく、
性格もどちらかという気短かで気が強いので、やっつ
けてしまうということになるのです。SちゃんとY君だ
けでなく、何人かで遊んでいて泣き声が聞こえて行って
みれば、やっつけているのはいつもMといったことが多
いこの頃です。

こんなMを見ていると、長女Aが二才頃の近所のEち
やんを思い出します。一緒に遊んでいてEちゃんのおも
ちゃを使うとだめと行ってドンとつきとばす、かわいい
キティーちゃんのついた自転車にさわっているとだめと
言ってドンと手が出てしまいます。Eちゃんにもそれな
りのつもりがあるのでしょうか、おかあさんは、だめで
しょEちゃん、そんなこと言わないのよと言いながら追
いかけてまわしていました。Eちゃんの弟が生まれたり、
冬になったりで、Eちゃんは家で遊びAたちとは一緒に



遊ぶことがなくなった時期がありました。春になり四才近くなったEちゃんはひとり外に出てきて遊び始めました。友だちと遊びたくて、遊ぼうと言ってきます。けれども、我家のAやその仲間は、今のMのように友だちとさんざんけんかをする中で、一緒に遊ぶときのゆずったり、ゆずられたり、主張したり、友だちの言うことを聞いたりするそのやりとりを自然と身につけ、子どもたち同志で楽しく遊べるようになっていました。そこへ以前のままのEちゃんがぼんと現われたわけです。遊びのやりとりなしに、だめ、どうしてもだめなの、ドンと手が出てきます。Aたちは遊びをかきまわされるだけでおもしろくなくなっていました。Eちゃんも入れてあげたらとか、Eちゃんはこういうつもりなのよとおとなが言ってみたり、Eちゃんにだめばかり言っては遊べないのよと言ってみても、Eちゃんも入れて楽しく遊ぶという風にはなりませんでした。

SちゃんやY君やMたちのけんかのそばにいと、ものすごいエネルギーだなと思います。どうにかうまくし

ようと、そこにいるおとなは話してみたり、物をだしてきたりします。そんなことをしているとおとながどっと疲れます。上の子Aの時には、やつつけられるばかりでしたので、たまにはやつつけてきたらといらいらすることはありました。気が楽といえは楽でした。けれども今は、Mがやつつけている方です。家でひとりで遊んでくれるか、外へほっぽりだして知らんぷりをしていれば、どんなに楽かと思えます。冬の間、家でひとりで遊ばせていたEちゃんのおかあさんの気持ちが変わらないでもありません。けれども、春になってひとりで出てきたEちゃんの様子を思いおこすたびに、このもつれた糸のようなけんかの時期をじっくり越すべきなのだと思うのです。

今三人の子どもたちは、おとながぐっと待たなければならぬ時を生きている様です。靴をはくのも、ドアを開けるのも、自分でやるのと言います。おとながさっとやってしまったりすると、自分でと言って大さわざ。友だちのことが気になり、外へ行くのが大好きで、それで

いて、友だちにはすぐだめ、いやと言っています。それゆえ、友だちとこんがらがることも多いのですが、三人の親は、あぶなくなければ、じっと見えています。自分の子どもがやられていても、Mをいやがったりするわけでもなく、(時には、いやだと思うこともあるでしょうが。)私が見ていない時には、Mをわかりもしてくれ、またよくほめてのせてしまう人たち。何よりも自分たちがのってしまい、子どもとの生活を楽しめる、そんなおかあさんたちがいてくれることをうれしく思います。

子どもと楽しく過せるおかあさんたちでも一日中子どもと一緒にいると、ほっと一息ぬきたくなる場合があります。Sちゃんは、おかあさんにべったりでした。自宅の庭で遊んでいても、おかあさんの姿が見えないと、おかあさんは、おかあさんとはパニックになったようです。Sちゃんのおかあさんは、今はこういう時なのだと自分に言いきかせ、いつかはきつと離れる時がくるとその日をじっと待っていました。その日がやっと訪れましました。SちゃんとMが二人だけでお互いの家を行ったり来

たり始めたのです。Sちゃんのおかあさんは少しずつ変わりは始めた子どもの様子に少しほっとした様でした。まだ、すぐにこんがらがらる糸のような子どもたちですが、少しずつほぐれてきたら、きっと子どもたち自身の楽しい生活が広がると思います。その時には、お互いほっとひと息ぬきながら、楽しく子育てをしようとSちゃんのおかあさんと話しています。それまでしばらくの間、一日少しの時間でも子どもたちと一緒に楽しく過そうと思おうのです。

これから新潟は、半年間という長い冬に入ります。雪が降るまでは、外で遊ぶこともできなくなりそうです。子どもたちも欲求不満になることでしょう。持ちまわり我家開放デーを作り、親子共々暗い冬を楽しく過そうと話しているところです。